

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	大学生の医薬品に関する意識調査
Author(s)	茂中, 瑞希; 山川, 希望; 廣原, 紀恵
Citation	茨城大学教育学部紀要. 教育科学, 66: 313-326
Issue Date	2017-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/13288">http://hdl.handle.net/10109/13288</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

## 大学生の医薬品に関する意識調査

茂中瑞希\*・山川希望\*・廣原紀恵\*\*

(2016年11月1日受理)

## Awareness Survey of Medicine in University Students

Mizuki SHIGENAKA\* and Nozomi YAMAKAWA\* and Toshie HIROHARA\*\*

(Accepted November 1, 2016)

### はじめに

2000年（平成12年）にWHO（世界保健機関）が「自分自身の健康に責任をもち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」をセルフメディケーションと定義し<sup>1)</sup>、我が国ではそれを受け、平成21年に「薬事法の一部を改正する法律」によって医薬品の販売の在り方を見直した。この法律の施行により、国民は医薬品を容易に手に入れやすくなり、医薬品を適切に使うことができるようになった<sup>2)</sup>。そのため学校教育において医薬品の適正使用に関する知識の普及や啓発が必要とされ、平成21年に教科「保健体育」学習指導要領が新しく告示された。保健体育科目「保健」の中での医薬品は、従来は「喫煙・飲酒・薬物乱用」と平行して学んでいたが、新たな学習指導要領では医薬品は、「喫煙・飲酒・薬物乱用」の学習と分けられ、「医薬品を正しく使用する」ことから、「医薬品の主作用や副作用だけでなく、医薬品は有効性や安全性が審査されていること、販売方法に規制があること」など、医薬品使用の背景情報も盛り込まれ、生徒が医薬品に関して、知識を獲得しセルフメディケーションの観点から医薬品を正しく選択し、使用できる能力が必要となった。

これまでに、男性より女性のほうが大衆薬（家庭用内服薬）を正しく使用していること、大衆薬の正しい使用方法の基本について啓発活動を行っていく必要があること<sup>3)</sup>、ほとんどの中学生が薬を利用しており、自然治癒力を理解している生徒ほど薬の利用頻度が低いこと、自身が健康だと思ふ生徒ほど薬の利用頻度は低いこと<sup>4)</sup>などが報告されている。また塚ら<sup>5)</sup>の調査では中・高校生の医薬品使用にかかわる行動や態度には性差・学校種差があること、約9割の生徒が注意書きを読むことは大切だと思っているものの実際に読んでいるのは約半数であることなどを報告している。大学生を対象に医薬品使用等の報告<sup>3) 6)</sup>や中・高校生に対して医薬品使用の実態や行動・態度

---

\*茨城大学大学院教育学研究科（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Graduate School of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan).

\*\*茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan)

についての報告<sup>4) 5) 7)</sup>はなされている。しかし、医薬品についての指導に関する報告は、あまり見当たらない<sup>8) 9)</sup>。また、教科保健体育学習指導要領改正に伴う学習内容の違いによる医薬品の使用や知識の比較について調査した報告も見受けられなかった。そこで本研究では、大学生の医薬品使用の実態や意識等を調査し、保健体育の学習内容の違いによる医薬品の使用実態や知識の比較検討することを目的とする。

## 方法

調査対象は、I大学に在学する大学生男女である。方法は、I大学内で開講されている7つの授業において、それぞれの授業担当者の承諾を得たのち、研究者らが、講義時間中に質問紙を配布・回収した。質問紙配布の際、調査結果は研究のみに使用すること、調査の参加の有無は自由であること、参加しなくても不利をこうむらないことを口頭と文書で説明した。質問紙は無記名自己記入式で回答してもらい、対象者が質問紙を提出することにより調査の同意を得たものとした。調査の時期は、2016年1月下旬から2月中旬である。

分析は、SPSS (Version19.0) for Windows を用いてクロス集計および $\chi^2$ 検定を行った。

調査内容は、I対象者の属性（学部、性別、学年、高等学校入学年度）、II医薬品の利用について（薬だと思ふものの選択、薬の利用頻度、利用する薬の種類等）、III学校での医薬品の学習と医薬品利用について（医薬品の学習の有無と学習した時期、学校での薬利用の有無と利用した薬の種類等）、IV医薬品に関する語句の認知度について（一般医薬品、医療用医薬品、第一類医薬品等）である。

## 結果

回答を得られた335名のうち、回答に不備のあったものを除く294名を分析の対象とした。男性108名、女性186名で有効回答率は87.8%であった。高等学校における医薬品の学習内容が、平成24年度から学習指導要領が改正されたことを受け、高等学校への入学が平成24年度より前の者をグループ1（以下G1）、新学習指導要領で学習した平成24年度以降に入学した者をグループ2（以下G2）と分類し、分析した。

### I. 対象者の属性

#### 1) 学部の所属について（表1）

「教育」に所属する者が138名（46.9%）で最も多く（G1が65名、G2が73名）、次いで「人文」が、93名（31.6%）（G1が12名、G2が81名）であった。「理学」は、32名（10.9%）、「工学」は、10名（3.4%）、「農学」は、21名（7.1%）であった。

	G1(n=88)								G2(n=206)							
	男性(n=17)				女性(n=71)				男性(n=91)				女性(n=115)			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%				
人文	5	29.4	7	9.9	35	38.5	46	40.0								
教育	4	23.5	61	85.9	20	22.0	53	46.1								
理学	5	29.4	2	2.8	21	23.1	4	3.5								
工学	1	5.9	0	0.0	5	5.5	4	3.5								
農学	2	11.8	1	1.4	10	11.0	8	7.0								

## 2) 学年について (表2)

1年生は216名(73.5%), 2年生は38名(12.9%), 3年生は36名(12.2%), 4年生は4名(1.4%)であった。なお、G2は、高等学校への入学が平成24年度のため大学2・3・4年生はいない。

	G1(n=88)								G2(n=206)							
	男性(n=17)				女性(n=71)				男性(n=91)				女性(n=115)			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%				
1年次	8	47.1	2	2.8	91	100.0	115	100.0								
2年次	4	23.5	34	47.9	0	0.0	0	0.0								
3年次	4	23.5	32	45.1	0	0.0	0	0.0								
4年次	1	5.9	3	4.2	0	0.0	0	0.0								

## 3) 現在の同居人について (表3)

「家族」は116名(39.5%), 「一人」は165名(56.1%), 「友人」は7名(2.4%), 「その他」は6名(2.0%)で親戚, 恋人, ルームメイト, 寮, 親戚だった。G1, G2ともに「一人」が最も多く, 次いで「家族」だった。

	G1(n=88)				G2(n=206)			
	男性(n=17)		女性(n=71)		男性(n=91)		女性(n=115)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
家族	6	35.3	22	31.0	26	28.6	62	53.9
一人	10	58.8	47	66.2	62	68.1	46	40.0
友人	1	5.9	2	2.8	1	1.1	3	2.6
その他	0	0.0	0	0.0	2	2.2	4	3.5

## II. 医薬品の利用について

## 【1】あなたが薬だと思えるものをすべてお選び下さい (図1) (注参照)。

「あなたが薬だと思えるものをすべてお選び下さい」という質問をし, 医薬品だと思えるものを選択させた。医薬品, 健康食品の選択肢として設定した商品名は, ①アレグラ<sup>®</sup>FX (第1類医薬品, 久光製薬株式会社: フェキソフェナジン塩酸塩錠), ②イブ<sup>®</sup>A錠 (第2類医薬品, エスエス製薬株式会社: イブプロフェン配合製剤), ③ツムラ漢方 葛根湯 (第2類医薬品, 株式会社ツムラ: 漢方製剤), ④チョコラBB<sup>®</sup> (第3類医薬品, エーザイ株式会社: ビタミンB<sub>2</sub>主薬製剤), ⑤コエンザイムQ10 (健康食品, 株式会社ファンケル 他), ⑥DHC コラーゲン (健康食品, 株式会社DHC), ⑦オロナイン<sup>®</sup>H軟膏 (第2類医薬品, 大塚製薬株式会社: 皮膚疾患・外傷治療薬), ⑧ムヒ<sup>®</sup>S (第3類医薬品, 株式会社池田模範堂: 鎮痒消炎剤), ⑨アイボン<sup>®</sup> (第3類医薬品, 小林製薬株式会社: 洗眼薬), ⑩ロートリセb (第2類医薬品, ロート製薬株式会社: 目薬), ⑪サロンパス<sup>®</sup> (第3類医薬品, 久光製薬株式会社: 鎮痛消炎プラスタール), ⑫リポビタンDロイヤル (第3類医薬品, 大正製薬株式会社: ドリンク剤), ⑬プロテイン (健康食品, 江崎グリコ株式会社 他)である。なお, ⑤コエンザイムQ10, ⑥DHC コラーゲン, ⑬プロテインは医薬品ではないため, 選択しなかった者を正答とした。

①アレグラ<sup>®</sup>FXを「薬だと思える」と回答した者は, G1が61名(69.3%), G2が155名(75.2%)であった。②イブ<sup>®</sup>A錠は, G1が85名(96.6%), G2が195名(94.7%)であった。③ツムラ漢方 葛根湯は, G1が52名(59.1%), G2が131名(63.6%)であった。④チョコラBB<sup>®</sup>は, G1が37名(42.0%), G2が83名(40.3%)であった。⑤コエンザイムQ10は, G1が21名(23.9%), G2が56名(27.2%)であった。⑥DHC コラーゲンは, G1が2名(2.3%), G2が23名(11.2%)であった。⑦オロナイン<sup>®</sup>H軟膏は, G1が68名(77.3%), G2が49名(23.8%)であった。⑧ムヒ<sup>®</sup>Sは, G1が63名(71.6%), G2が135名(65.5%)であった。⑨アイボン<sup>®</sup>は, G1が24名(27.3%), G2が49名(23.8%)であった。⑩ロートリセbは, G1が32名(36.4%), G2が60名(29.1%)であった。⑪サロンパス<sup>®</sup>は, G1が48名(54.5%), G2が89名(43.2%)であった。⑫リポビ

タンDロイヤルは、G1が3名（3.4%）、G2が17名（8.3%）であった。⑬プロテインは、G1が2名（2.3%）、G2が11名（5.3%）であった。

それぞれの医薬品、健康食品の正答率を図1に示した。G1,G2のどのグループでも健康食品である「プロテイン」の正答率は最も高かった。一方、どのグループでも「リポビタンDロイヤル」の正答率が最も低かった。「リポビタンDロイヤル」は、第3類医薬品の指定があるもので、いずれのグループにおいても30%以下であった。男性よりも女性の方が正答率が高い内服薬は、「アレグラ<sup>®</sup>FX」,「イブ<sup>®</sup>A錠」であった。

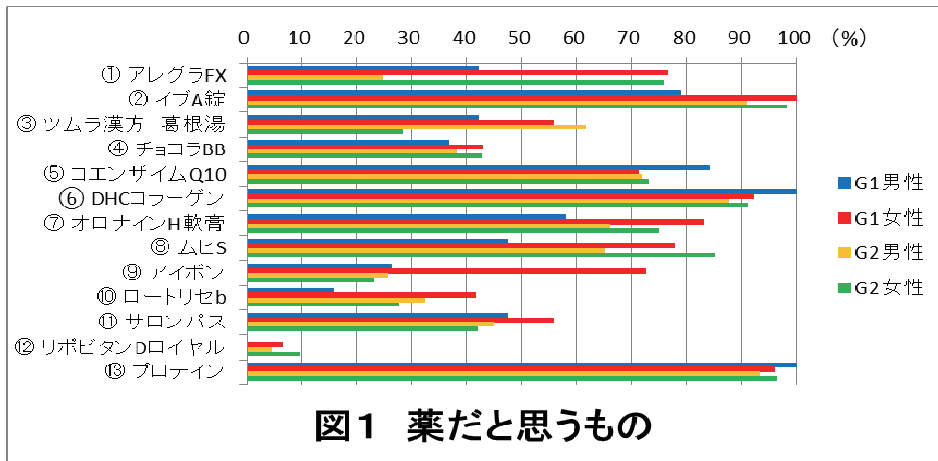


図1 薬だと思うもの

【2】内服薬（口から入れる薬）、外用薬（内服薬・注射を除く薬）を利用することがありますか（医師に処方されたものは除く）（表4）。

内服薬（口から入れる薬）、外用薬（内服薬・注射を除く薬）を利用するかどうかを、医師に処方されたものは除くとして尋ねた。「よく利用する」「ときどき利用する」「たまに利用する」のは、G1、G2ともに女性の方が多かった。「よく利用する」「ときどき利用する」「たまに利用する」と回答した者を「医薬品利用群」とし、全体で262名（89.1%）、G1は83名（94.3%）、G2は179名（68.3%）で、G1のほうが利用頻度は高かった。「全く利用しない」と回答した者を「医薬品非利用群」とし、全体で32名（10.9%）、G1は5名（5.7%）、G2は27名（13.1%）であった。

次に、「医薬品利用群」である262名に、利用する医薬品の種類、使用する際の判断等を尋ねた。

1) どの種類を利用しますか（表5）。

「どの種類の医薬品を使用しますか」という質問に対し、「内服薬」と回答した者は93名（35.5%）（G1が30名、

	G1(n=88)								G2(n=206)							
	男性(n=17)				女性(n=71)				男性(n=91)				女性(n=115)			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%				
よく利用する	1	5.9	10	14.1	12	13.2	21	18.3								
ときどき利用する	5	29.4	31	43.7	17	18.7	51	44.3								
たまに利用する	8	47.1	28	39.4	42	46.2	36	31.3								
全く利用しない	3	17.6	2	2.8	20	22.0	7	6.1								

	G1(n=83)								G2(n=179)							
	男性(n=14)				女性(n=69)				男性(n=71)				女性(n=108)			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%				
内服薬	7	41.2	23	32.4	26	28.6	37	32.2								
外用薬	1	5.9	3	4.2	14	15.4	10	8.7								
どちらも	6	35.3	43	60.6	31	34.1	61	53.0								

G2が63名),「外用薬」は28名(10.7%)(G1が4名, G2が24名),「どちらも利用する」者は141名(53.8%)(G1が49名, G2が92名)であった。

2) 誰の判断で薬を利用しますか(表6)。

「誰の判断で薬を利用しますか」という質問に対し、「自分で判断する」と回答した者は215名(82.1%)(G1が76名, G2が139名),「家族が判断する」は28名(10.7%)(G1

表6 薬利用の判断

	G1(n=83)				G2(n=179)			
	男性(n=14)		女性(n=69)		男性(n=71)		女性(n=108)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
自分	12	85.7	64	92.8	61	85.9	78	72.2
家族	1	7.1	1	1.4	5	7.0	21	19.4
先生	0	0.0	0	0.0	1	1.4	3	2.8
その他	1	7.1	4	5.8	4	5.6	5	4.6
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.9

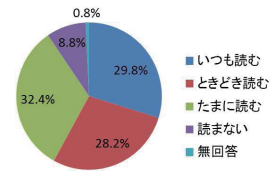
が2名, G2が26名),「先生が判断する」は4名(1.5%)(G2が4名),「友人が判断する」,「保健管理センターの判断で使用する」は0名であった。「その他」は14名(5.3%)(G1が5名, G2が9名)であった。「その他」の内容は,「自分と家族」,「医師」,「薬剤師」などであった。

3) 薬を使用するとき, 説明書を読みますか(表7, 図2)。

「いつも読む」,「ときどき読む」,「たまに読む」と回答した者は全体で237名(90.5%), G1は78名(94.0%), G2は159名(88.8%)であった。「読まない」と回答した者は全体で23名(8.8%), G1は4名(4.8%), G2は19名(10.6%)であった。無回答は2名(0.8%)であった。

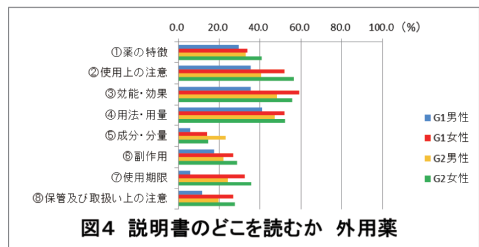
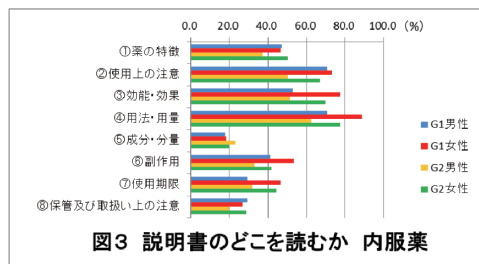
表7 説明書を読むか

	G1(n=83)				G2(n=179)			
	男性(n=14)		女性(n=69)		男性(n=71)		女性(n=108)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
いつも読む	8	57.1	20	29.0	20	28.2	30	27.8
ときどき読む	4	28.6	18	26.1	18	25.4	34	31.5
たまに読む	1	7.1	27	39.1	26	36.6	31	28.7
読まない	1	7.1	3	4.3	6	8.5	13	12.0
無回答	0	0.0	1	1.4	1	1.4	0	0.0



4) 説明書のどこを読みますか(図3, 4)。

「説明書のどこを読みますか」という質問を内服薬, 外用薬それぞれ尋ね,「①薬の特徴」「②使用上の注意」「③効能・効果」など8つの項目から複数回答可として選択させた。その結果, 内服薬では, G1男性は「②使用上の注意」,「④用法・用量」が最も多く, 12名(70.6%)であった。G1女性, G2男性, G2女性は「④用法・用量」と回答する者が最も多く, G1女性63名(88.7%), G2男性57名(62.6%), G2女性89名(77.4%)であった。一方, 説明書を読まない者を見てみると,「⑤成分・分量」は, G1男性14名(82.4%), G1女性58名(81.7%), G2女性92名(80.0%)であった。G2男性は「⑧保管及び取り扱い上の注意」を読まない者が最も多く, 73名(80.2%)であった。



外用薬で、「②使用上の注意」を読む者がG1男性で7名(41.2%)、G2女性で65名(56.5%)であり、最も多かった。G1女性、G2男性は「③効能・効果」と回答する者が最も多く、G1女性42名(59.2%)、G2男性は44名(48.4%)であった。一方、G1男性は「⑤成分・分量」、「⑦使用期限」を読まない者が16名(94.1%)で最も多かった。G1女性、G2女性は「⑤成分・分量」を読まない者が最も多く、G1女性が61名(85.9%)、G2女性が98名(85.2%)であった。G2男性は「⑧保管及び取り扱い上の注意」を読まない者が最も多く、73名(80.2%)であった。

### [3] どのような理由で薬を利用しますか（複数回答可）（表8）。

「どのような理由で薬を利用しますか」という質問に対し、「体調がすぐれないから」「忙しくて病院に行けないから」など「その他」を含む8項目から複数回答可として選択させた。「体調がすぐれないから」

	G1(n=83) G2(n=179)							
	G1(n=83)				G2(n=179)			
	男性(n=14)		女性(n=69)		男性(n=71)		女性(n=108)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
体調がすぐれない	6	42.9	60	87.0	51	71.8	91	84.3
忙しくて病院に行けない	1	7.1	10	14.5	6	8.5	12	11.1
お金がない	0	0.0	1	1.4	1	1.4	2	1.9
休養できない	1	7.1	11	15.9	5	7.0	11	10.2
病院に行くほどでない	10	71.4	54	78.3	36	50.7	75	69.4
疾患の治療中	2	14.3	3	4.3	8	11.3	2	1.9
その他	1	7.1	1	1.4	2	2.8	1	0.9

と回答した者は208名(79.4%) (G1が66名、G2が142名)、「忙しくて病院に行けないから」は29名(11.1%) (G1が11名、G2が18名)、「お金がなくて病院に行けないから」は4名(1.5%) (G1が1名、G2が3名)、「どうしても休養できないから」は28名(10.7%) (G1が12名、G2が16名)、「病院に行くほどの症状でないから」は175名(66.8%) (G1が64名、G2が111名)、「現在、何らかの疾患の治療中であるから」は15名(5.7%) (G1が5名、G2が10名)、「その他」が5名(1.9%) (G1が2名、G2が3名)であった。なお、選択肢に設定した「保険証がないから」を選択した者はいなかった。

### [4] あなたは薬を飲むとき、何で飲みますか（表9）。

「あなたは薬を飲むとき、何で飲みますか。」という質問に対し、「何も飲まない」と回答した者は3名(1.1%) (G1が2名、G2が1名)、「水」は255名(97.3%) (G1が81名、G2が174名)、「お湯」は68名(26.0%) (G1が21名、G2が47名)、「お茶」は101名(38.5%) (G1が32名、G2が69名)、「炭酸飲料以外のジュース」は6名(2.3%) (G1が2名、G2が4名)、「炭酸飲料」は3名(1.1%) (G2が3名)、「お酒」は1名(0.4%) (G2が1名)、「コーヒーマン・紅茶」が4名(1.5%) (G1が1名、G2が3名)、「牛乳」が2名(0.8%) (G2が2名)、「スポーツドリンク」が9名(3.4%) (G1が1名、G2が8名)であった。

	G1(n=83) G2(n=179)							
	G1(n=83)				G2(n=179)			
	男性(n=14)		女性(n=69)		男性(n=71)		女性(n=108)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
何も飲まない	0	0.0	2	2.9	0	0.0	1	0.9
水	13	92.9	68	98.6	70	98.6	104	96.3
お湯	2	14.3	19	27.5	15	21.1	32	29.6
お茶	4	28.6	28	40.6	21	29.6	48	44.4
炭酸飲料以外のジュース	0	0.0	2	2.9	3	4.2	1	0.9
炭酸飲料	0	0.0	0	0.0	2	2.8	1	0.9
お酒	0	0.0	0	0.0	1	1.4	0	0.0
コーヒーマン・紅茶	0	0.0	1	1.4	0	0.0	3	2.8
牛乳	0	0.0	0	0.0	2	2.8	0	0.0
スポーツドリンク	0	0.0	1	1.4	5	7.0	3	2.8
その他	0	0.0	1	1.4	0	0.0	0	0.0



Ⅲ. 医薬品の学習と学校での医薬品利用について

1) 医薬品について習ったことはありますか (表 10)。

「はい」と回答した者は G1 が 51 名 (58.0%), G2 が 46 名 (22.3%) であった。「いいえ」は G1 が 33 名 (37.5%), G2 が 134 名 (65.0%) であった。「はい」と回答した者の割合は, G1 の方が多かった。

表10 医薬品について習ったことはあるか

	G1(n=88)				G2(n=206)			
	男性(n=17)		女性(n=71)		男性(n=91)		女性(n=115)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
はい	4	23.5	47	66.2	20	22.0	26	22.6
いいえ	9	52.9	24	33.8	52	57.1	82	71.3
無回答	4	23.5	0	0.0	19	20.9	7	6.1

2) それはいつごろですか (表 11)。

医薬品について習ったことがあると回答した者 97 名 (33.0%) のうち「小学校」は 6 名 (6.2%) (G1 が 2 名, G2 が 4 名), 「中学校」は 34 名 (35.1%) (G1 が 13 名, G2 が 21 名), 「高等学校」は 59 名 (60.8%) (G1 が 30 名, G2 が 29 名), 「大学」は 34 名 (35.1%) (G1 が 26 名, G2 が 8 名), 「覚えていない」は 8 名 (8.2%) (G1 が 2 名, G2 が 6 名) であった。G1, G2 ともに最も多かった回答は, 「高等学校」であった。

表11 いつ医薬品について学習したか(複数回答可)

	G1(n=51)				G2(n=46)			
	男性(n=4)		女性(n=47)		男性(n=20)		女性(n=26)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
小学校	1	25.0	1	2.1	1	5.0	3	11.5
中学校	2	50.0	11	23.4	8	40.0	13	50.0
高等学校	0	0.0	30	63.8	13	65.0	16	61.5
大学	2	50.0	24	51.1	5	25.0	3	11.5
覚えていない	0	0.0	2	4.3	2	10.0	4	15.4

3) 小学校から高等学校までに学校で薬をもらったことはありますか (表 12)。

「内服薬をもらった」と回答した者は全体のうち 16 名 (5.4%), 「外用薬をもらった」は全体のうち 42 名 (14.3%), 「内服薬も外用薬ももらった」は全体のうち 13 名 (4.4%), 「もらったことはない」は全体のうち 188 名 (63.9%) であった。「内服薬をもらった」「外用薬をもらった」「内服薬も外用薬ももらった」の回答すべてにおいて, 学校で薬をもらったことがある者は, G1・G2 ともに男性より女性のほうが多かった。

表12 学校で薬をもらったか

	G1(n=88)				G2(n=206)			
	男性(n=17)		女性(n=71)		男性(n=91)		女性(n=115)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
内服薬をもらった	0	0.0	2	2.8	0	0.0	14	12.2
外用薬をもらった	3	17.6	17	23.9	6	6.6	16	13.9
内服薬も外用薬ももらった	0	0.0	2	2.8	2	2.2	9	7.8
もらったことはない	10	58.8	48	67.6	63	69.2	67	58.3
無回答	4	23.5	2	2.8	20	22.0	9	7.8

4) 誰から薬をもらいましたか (表 13)。

学校で薬をもらったことがある者 71 名 (24.1%) のうち, もらった相手が「友人」は 23 名 (32.3%), 「担任」は 2 名 (2.8%), 「養護教諭 (保健室)」は 60 名 (84.5%), 「先輩・後輩」は 4 名 (5.6%) だった。G1, G2 ともに学校で薬をもらった相手として最も多かったのは「養護教諭 (保健室)」で, 次いで「友人」であった。

表13 学校で誰から薬をもらったか(複数回答可)

	G1(n=24)				G2(n=47)			
	男性(n=3)		女性(n=21)		男性(n=8)		女性(n=39)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
友人	0	0.0	5	30.8	1	12.5	17	41.2
担任	0	0.0	2	3.8	0	0.0	0	2.9
養護教諭(保健室)	3	1.0	20	96.2	8	100.0	29	70.6
先輩・後輩	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	11.8
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.9



#### IV. 医薬品に関する語句の認知度について（表 14）

旧保健体育学習指導要領（平成 11 年）と現保健体育学習指導要領（平成 21 年）のもと、指導する医薬品に関して学習する語句「一般用医薬品」「医療用医薬品」「第一類医薬品」「医薬部外品」「副作用」「特定保健用食品」「サプリメント」「栄養機能食品」と、現保健体育学習指導要領で新たに学習する語句「医薬分業」「かかりつけ薬局」「薬の承認制度」「お薬手帳」の合計 12 語句についてそれぞれ説明文を掲載し、それについて「知っている」「聞いたことはあるが詳しくは知らない」「全くきいたことがない」の 3 択で尋ねた結果を示した。

表 14 語句の認知

	G1(n=88)								G2(n=206)							
	知っている		聞いたことはあるが詳しくは知らない		全くきいたことがない		無回答		知っている		聞いたことはあるが詳しくは知らない		全くきいたことがない		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
一般用医薬品	50	56.8	30	34.1	6	6.8	2	2.3 *	60	29.1	102	49.5	41	19.9	3	1.5
医療用医薬品	55	21.5	27	30.7	4	4.5	2	2.3 *	66	32.0	105	51.0	32	15.5	3	1.5
第一類医薬品	51	58.0	34	38.6	1	1.1	2	2.3 *	37	18.0	121	58.7	45	21.8	3	1.5
医薬部外品	45	51.1	29	33.0	12	13.6	2	2.3 *	49	23.8	97	47.1	57	27.7	3	1.5
副作用	81	92.0	4	4.5	1	1.1	2	2.3 n.s	174	84.5	24	11.7	5	2.4	3	1.5
特定保健用食品	31	35.2	50	56.8	5	5.7	2	2.3 n.s	101	49.0	81	39.3	21	10.2	3	1.5
サプリメント	45	51.1	39	44.3	2	2.3	2	2.3 n.s	109	52.9	84	40.8	10	4.9	3	1.5
栄養機能食品	15	17.0	60	68.2	11	12.5	2	2.3 n.s	57	27.7	115	55.8	31	15	3	1.5
医薬分業	33	37.5	31	35.2	22	25.0	2	2.3 *	41	19.9	72	35.0	90	43.7	3	1.5
かかりつけ薬局	55	62.5	24	27.3	7	8.0	2	2.3 n.s	107	51.9	73	35.4	23	11.2	3	1.5
薬の承認制度	10	11.4	48	54.5	28	31.8	2	2.3 n.s	21	10.2	82	39.8	100	48.5	3	1.5
お薬手帳	71	80.7	12	13.6	3	3.4	2	2.3 n.s	141	68.4	43	20.9	19	9.2	3	1.5

(\*p&lt;0.01)

G1で「知っている」と回答したのは「副作用」81名（92.0%）が最も多く、次いで「お薬手帳」71名（80.7%）であった。「聞いたことはあるが詳しくは知らない」は「栄養機能食品」60名（68.2%）が最も多く、次いで「特定保健用食品」50名（56.8%）であった。「全くきいたことがない」は「薬の承認制度」28名（31.8%）が最も多く、次いで「医薬分業」22名（25.0%）であった。

G2で「知っている」は「副作用」174名（84.5%）が最も多く、次いで「お薬手帳」141名（68.4%）であった。「聞いたことはあるが詳しくは知らない」は「第一類医薬品」121名（58.7%）が最も多く、次いで「栄養機能食品」115名（55.8%）であった。「全くきいたことがない」は「薬の承認制度」100名（48.5%）が最も多く、次いで「医薬分業」90名（43.7%）であった。

また、G1とG2の間で12語句の認知に差があるか $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「一般用医薬品」「医療用医薬品」「第一類医薬品」「医薬部外品」「医薬分業」の5語句に回答の仕方に有意な差が認められた。回答の仕方に有意な差が認められた5語句について「知っている」・「聞いたことはあるが詳しくは知らない」の回答の割合を「認知している」とし、G1とG2で比較したところ、G1の方がG2より「一般用医薬品」「医療用医薬品」「第一類医薬品」「医薬部外品」「医薬分業」について認知している傾向がみられた。

#### 考察

##### 1) 大学生における医薬品の理解

G1, G2ともに「薬だと思ふもの」の正答率が70%を上回ったものは解熱・鎮痛剤である「イブ®A錠」のみであり、特に女性の正答率は高く、G1女性の正答率は100.0%、G2女性は98.3%であった。堺ら<sup>5)</sup>は、「頭痛や生理痛は女子中・高校生が日常生活の中で経験する体調不良の中でも頻度が高く、鎮痛薬をよく利用するからである」としており、本研究でも同様のことが言えよう。

「コエンザイム Q10」, 「DHC コラーゲン」, 「プロテイン」はいずれも健康食品・サプリメントとして販売されているものである。「プロテイン」の正答率は全体では95.6%、「DHC コラーゲン」は91.5%、「コエンザイム Q10」は73.8%で、正答率は高かった。杉山ら<sup>10)</sup>の報告では、女子大学生はサプリメントや食に関する情報をテレビ、雑誌、口コミで得ているとしている。「コエンザイム Q10」, 「DHC コラーゲン」, 「プロテイン」などの健康食品は、すでに情報としてどのような役割を果たすものであるかを得ていたために、正答率が高かったと思われる。

G1, G2ともに低い正答率だった、「リポビタン D ロイヤル」は第3類医薬品の医薬品である。他にも「リポビタン」には、第2類あるいは第3類医薬品として販売される商品もある。さらに名称に「リポビタン」と入る商品の中には「リポビタン D」, 「リポビタンファイン」などのように、医薬部外品として販売される商品がある。そのため、「リポビタン D ロイヤル」を医薬品ではなく、一般的な栄養ドリンク剤と考えたのではないかと思われる。含有成分によって医薬品としての区分が規定されていることが理解できていないと正答できない商品名だったため、G1, G2ともに著しく正答率が低い結果になったと考えられる。

医薬品かそうでないかの正答率に差がある要因として、その医薬品がどのような効果を持つ医薬品であるのかを知らないこと、また、その医薬品を適用する症状が現れたことがなく使用したことがないために知らないこと等が考えられる。

## 2) 大学生における医薬品の使用実態

「医薬品を使用しますか」という質問に対し、「よく利用する」, 「ときどき利用する」, 「たまに利用する」と回答した者は全体で262名(89.1%)であった。森口と石原の調査<sup>6)</sup>では「あなたは薬を利用することがありますか。」という質問に対し「よくある」と「ある」は合わせると59.1%、「あまりない」は35.2%、「まったくない」は5.7%で、約90%の者が使用していた。本調査でも同様の結果であったことから、大学生の薬の利用率は高いといえよう。中・高校生対象の調査でも90%以上の者が使用している<sup>11)</sup>ことから年代に関わらず医薬品の利用率は高いと思われる。また、医薬品を使用する理由として、「体調がすぐれない」と回答した者が全体で208名(79.3%)、「病院に行くほどでない」と回答した者が全体で175名(66.8%)であった。自己の健康に関心を持ち医薬品等で体調を整えることができる、セルフメディケーション能力が身につけている者の割合が高いと考えられる。しかし、医薬品利用群はG1が83名(94.3%)、G2が179名(68.3%)であり、新学習指導要領での医薬品に関する内容を履修していないG1の方が医薬品利用率は高かった。そのためセルフメディケーション能力は、医薬品を利用する経験のなかで得た知識によるものなのか、医薬品に関する保健学習の効果によるものなのかは明らかではない。

一方、医薬品利用群では、医薬品を自己判断で利用する者が215名(82.1%)と高頻度であるにもかかわらず、医薬品に添付されている取扱説明書を「いつも読む」と回答した者が78名(29.8%)であった。中・高校生は、約50%が読むとしている<sup>5)</sup>ことから、本調査対象の大学生は低い頻度

である。これは、医薬品の主作用は理解していても、どのような副作用が起こりうるのかを確認する必要があることや、どのような場合に医療機関を受診すべきかなどを確認した上で医薬品を使用することの理解がまだ十分でない、あるいは、学年が進むにつれ、自己判断で医薬品を使用している経験の中から取扱説明書を読む習慣が失われてきているのかもしれない。自己判断で適切に医薬品を使用できるようにするために、中・高校生段階から医薬品の添付文書の読み方についての指導<sup>5)</sup>を継続して行うことが必要である。

内服薬の添付文書のどこを読むかでは、G1男性は「②使用上の注意」、④用法・用量」、G1女性、G2男性、G2女性は「④用法・用量」を読む者が最も多かった。外用薬においては、G1男性、G2女性は「②使用上の注意」、G1女性、G2男性は「③効能・効果」を読む者が最も多かった。内服薬の服用には用法・用量が重要であることを認識していることがうかがえる。

内服薬の添付文書で読まない者が最も多かった項目は、G1男性、G1女性、G2女性で「⑤成分・分量」、G2男性は「⑧保管及び取り扱い上の注意」であった。外用薬では、G1男性で「⑤成分・分量」、⑦使用期限」、G1女性、G2女性で「⑤成分・分量」、G2男性で「⑧保管及び取り扱い上の注意」であった。これは、医薬品の成分・分量を確認しなくても、効能・効果を確認すれば、その医薬品がどのような作用をするかを理解し使用できるためと考えられる。セルフメディケーションにおける医薬品使用について望月<sup>12)</sup>は、「(医薬品の)効果を最大に引き出し、副作用を最小化するためには医薬品の適正使用の三原則（正しい薬を、正しい量で、正しい時間に使うこと）を守って正しく使うことが求められる」としている。医薬品は同じ効能・効果であっても成分・分量が異なるものも多いため、医薬品が体内でどのように吸収されて働くのか、どのような副反応や副作用があり健康被害があるのかを理解した上で適切な医薬品の選択ができなければならないだろう。

内服薬を服用する際に、水と一緒に飲むと回答した者は医薬品利用群において255名(97.3%)、お茶と回答した者は101名(38.5%)、お湯と回答した者は68名(26.0%)であった。水またはお湯以外の飲料で服用することにより医薬品の効能・効果が変化するものもあるということ、G1、G2どちらのグループでも認識している者が多いと考えられる。しかし、水またはお湯以外の飲料で内服薬を服用している者もみられ、医薬品の種類によっては、果実飲料や緑茶に含まれる成分との相互作用により医薬品の十分な効果が得られない場合や医薬品の効果が過剰になってしまうこともある<sup>13)</sup>ため、内服薬服用の際には注意が必要である。医薬品を使用する際に「水で飲む」、「用法・用量を確認してから医薬品を使用する」ということはほぼ知識として定着しており、G1、G2どちらのグループにおいても医薬品を使用する際に適切に行動選択していると考えられる。一方で、医薬品を選択する際には成分・分量をG1、G2どちらのグループにおいても確認していない者が多いことから、新学習指導要領における医薬品についての学習の有無に関わらず、医薬品の選択において何を判断基準とすべきかの理解がなされていないと考えられ、今後の医薬品に関する教育の課題の一つといえよう。

### 3) 学校での医薬品学習状況・利用状況

医薬品について学習した経験がある者は全体のうち97名(33.0%)おり、主に中学校、高等学校および大学で学習していた。堺ら<sup>14)</sup>は自己判断で薬を使用する者が多くなる時期は思春期の後半であるとしている。医薬品の正しい使い方等について、中学校および高等学校の時期に医薬品を

学習することは必要だと思われる。

また、森口と石原<sup>6)</sup>は、大学生は「くすりを利用するとき自分で判断することが多い傾向がある」としており、本調査でも、医薬品を自己判断で利用する者が215名（医薬品を利用する者の82.1%）と高頻度であった。本調査対象の大学生は165名（56.1%）が「一人」で住んでいるため、自己判断で医薬品を使用する者が多くなったのだろう。そのためにも中学校および高等学校だけではなく、大学でも医薬品の正しい使い方等の学習をすることが望ましいといえよう。医薬品について学習した経験が無い者は全体のうち167名（56.8%）で、医薬品について学習した経験がある者より経験が無い者のほうがやや多かった。特にG2は新学習指導要領に改正された教育を受けた学年にも関わらず「医薬品について学習した経験が無い」とする者が134名（65.0%）で、半数を超えていた。医薬品については学習指導要領に明記されている内容であるため学習していないとは考えにくい、学習効果があまりなかったのか、医薬品についての授業実践の知見が少なく上手く授業が展開されていないからなのか、本研究では明らかにできなかった。より効果的な医薬品の授業実践の研究が今後の課題だろう。

また、医薬品をもらった相手はG1・G2ともに養護教諭（保健室）、友人の順で多かった。医薬品使用の自己判断をするようになる中・高校生<sup>14)</sup>が、自身の症状に合った薬を求め保健室に来室し、養護教諭は症状の緩和等のため医薬品配布の判断をするので、養護教諭からももらった者が多いのだろう。また、堺ら<sup>5)</sup>は、中・高校生は、医薬品の入手容易性において「友人」から入手するのは「保護者」「薬局・薬店で自分で買う」「家にある薬を飲む」と比較した際、難しいとしている。しかし、本調査では、学校で薬をもらう人物として「養護教諭（保健室）」に次いで「友人」が挙げられている。学校という薬が入手しにくい場であるため医薬品が必要な時に「友人にもらう」ことがあるのだろう。さらに中学生よりも高校生の方が、友人から医薬品をもらうことは容易だとしている<sup>5)</sup>。すなわち、発達段階が進み、ひとり暮らしも多い大学生は、より他者から医薬品をもらったりあげたりする可能性が高い。しかし、医薬品の副作用等を確認しないまま他者に医薬品を渡すことは危険が伴う<sup>13)</sup>。今後、自己判断で薬を使用する際に気をつけるべきこと、他者に薬を渡さないこと等について伝えていく必要がある。

#### 4) 医薬品に関する語句の認知について

「副作用」という語句は、「知っている」と回答した者はG1で81名（92.0%）、G2で174名（84.5%）であり、G1・G2ともに「知っている」と回答した者が80%以上だった唯一の語句だった。森口と石原<sup>6)</sup>の大学生を対象に行った調査では、「薬の副作用という言葉を知っていますか。」という質問に対し、「知っている」者が97.3%、「知らない」者が2.0%であり、「くすりの副作用という言葉の認知度は高い」ということを明らかにしている。本調査を森口と石原の調査<sup>6)</sup>と比較すると、「副作用」を「知っている」者の割合は少ない。しかし、本調査では「副作用」を「知っている」「聞いたことはあるが詳しくは知らない」「全く聞いたことがない」の3択で尋ねており、それに対し、森口と石原の調査<sup>6)</sup>では「知っている」「知らない」の2択で尋ねている。本調査の「副作用」について「知っている」「聞いたことはあるが詳しくは知らない」者を合わせると、G1は85名（96.6%）でG2は198名（96.1%）であり、森口と石原の報告<sup>6)</sup>の副作用を「知っている」者の割合とほぼ同じであった。すなわち、「副作用」という言葉だけを知っていて、実際には、「聞いた

ことはあるが詳しくは知らない」のではないだろうか。本調査で「副作用」を「知っている」者は80%以上みられ、さらに、「聞いたことはあるが詳しくは知らない」を合わせると、森口と石原の調査結果<sup>6)</sup>とほぼ同じ割合であったことから、大学生は「副作用」についてよく知っていると思われる。

また、12語句中「一般用医薬品」「医療用医薬品」「第一類医薬品」「医薬部外品」「医薬分業」の5語句の回答の仕方にG1とG2間で有意な差が認められた。そして、G1とG2間の回答の仕方に有意な差が認められた5語句すべてに「G1の方が認知している」傾向がみられた。新しい学習指導要領で新たに加えられた「医薬分業」という語句もG1の方が認知している傾向がみられた。G1は大学入学前の教育ではなく、高等学校卒業後の生活の中で医薬品の知識を得ていると思われる、G2は学習効果があまり得られなかったとも思われる。成井ら<sup>15)</sup>の調査によると、薬や健康の情報源は「インターネット」が最も多く、G1もインターネットで医薬品の知識を得ている者が多いことが予想される。成井ら<sup>15)</sup>はまた、調査対象者を若年群（20歳未満、20代と30代）、中年群（40代と50代）、老年群（60代と70代以上）と分類し、検討したところ、年齢層が若くなるにしたがって、薬や健康の情報源で「インターネット」を選択する者の割合が有意に高くなったとしている。したがって、若年群に該当する大学生は、学校での保健学習ではなく、高等学校卒業後の生活においてインターネットの使用等を通して必要に応じて医薬品についての知識を得ていることが推測された。北垣<sup>16)</sup>は「我々は情報化社会の中で生活をしており、情報の中には健康に関する情報も含まれ、氾濫しているといっても過言ではない」という。すなわち、インターネット上には、医薬品の正しい情報だけでなく正しくない情報も氾濫していると考えられ、インターネット上の情報だけを鵜呑みにしてはいけないうだろう。堺ら<sup>5)</sup>は、「中・高校生は信頼できる情報の一つとしてインターネットを挙げている」と報告しており、そのために「医薬品に関する情報の信頼性を適切に判断する能力を形成するための方法や内容についても、今後検討する意義がある」としている。教育機関での指導の他に、メディアによる情報の提供の在り方も考慮しなければならないだろう。

また、「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てする」セルフメディケーションの影響で、これからますます自分で体調を把握し医薬品を使用するという機会が増えるだろう。そのために、高等学校卒業までに医薬品に関する正しい情報の入手方法や判断力を身につけられる保健学習が必要である。富岡ら<sup>17)</sup>は、医薬品に関する授業のモデルを提案し、実践し授業の有効性を確認している。今後さらに望ましい効果的な教育の在り方を考えていく必要がある。

## まとめ

大学生の医薬品使用の実態について調査した。高等学校への入学が平成24年度より前の者をG1、高等学校への入学が平成24年度以降の者をG2として検討した結果、G1が83名（94.3%）、G2が179名（86.9%）、全体で262名（89.1%）が医薬品を使用していた。G1・G2ともに医薬品使用の割合は高いが、詳細にみるとG1の方が医薬品を利用する割合は高かった。また、内服薬を「水で飲む」こと、内服薬利用時に「用法・用量を守る」などの医薬品使用の方法を知識として理解している者もG1・G2ともに多かった。一方、医薬品に添付されている説明書を「いつも読む」と回答した者はG1・G2ともに少なかったが、G1で28名（33.7%）、G2で50名（27.9%）とやや



G1のほうが多かった。G2よりも、G1の方が医薬品について学習したとする者の割合が高く、医薬品に関する語句を多く認知していた。一方で、医薬品について学習した経験が無いと回答した者が全体のうち167名(56.8%)と、半数を超えていた。説明書の読み方・読む必要性等を学び、医薬品を正しく利用するための主体的な判断力と実践力を培う保健学習および保健指導の充実をより一層図ることが必要だろう。本調査の限界として、本来新しい学習指導要領で学習しているはずのG2でも、学習したという自覚がないことは、何によるものかは明らかにできなかったことである。G1のほうが、医薬品の知識や医薬品使用にあたって望ましい行動をとっている傾向であった。G2の保健学習の効果があまりなかったのか、医薬品の授業知見が少なく上手く授業展開をすることが困難だったのかは、不明である。今後、医薬品の授業に関して、さらなる発展が望まれることが予想されるため、より効果的な医薬品の授業実践の研究が今後の課題である。

## 注

- ① 久光製薬株式会社 アレグラ FX 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.allegra.jp/product.pdf>
- ② エスエス製薬株式会社 イブ®A 錠添付文書 アクセス日 2016.9.30  
[http://www.ssp.co.jp/file/product/all/evea/pdf/package\\_insert.pdf?1460094446](http://www.ssp.co.jp/file/product/all/evea/pdf/package_insert.pdf?1460094446)
- ③ ツムラ株式会社 ツムラ漢方 葛根湯添付文書 アクセス日 2016.9.30  
[http://www.ssp.co.jp/file/product/all/evea/pdf/package\\_insert.pdf?1460094446](http://www.ssp.co.jp/file/product/all/evea/pdf/package_insert.pdf?1460094446)
- ④ エーザイ株式会社 チョコラ BB® 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
[http://www.eisai.jp/api/data/di\\_otc/28125563/pi.pdf](http://www.eisai.jp/api/data/di_otc/28125563/pi.pdf)
- ⑤ 株式会社ファンケル コエンザイム Q10 製品情報  
[http://www.fancl.co.jp/pub/coq10/index\\_lis.html?scid=Lis-gen-2coq100YP&utm\\_source=Lis&utm\\_medium=lis-gen&utm\\_campaign=lis-gen\\_2coq\\_100\\_YP](http://www.fancl.co.jp/pub/coq10/index_lis.html?scid=Lis-gen-2coq100YP&utm_source=Lis&utm_medium=lis-gen&utm_campaign=lis-gen_2coq_100_YP)
- ⑥ 株式会社 DHC DHC コラーゲン製品情報 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.dhc.co.jp/goods/goodsdetail.jsp?gCode=4388>
- ⑦ 大塚製薬株式会社 オロナイン®H 軟膏添付文書 アクセス日 2016.9.30  
[http://www.otsuka.co.jp/ohn/pdf/instruction\\_jp.pdf](http://www.otsuka.co.jp/ohn/pdf/instruction_jp.pdf)
- ⑧ 株式会社池田模範堂 ムヒ®S 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.ikedamohando.co.jp/products/pdf/muhi-s.pdf>
- ⑨ 小林製薬株式会社 アイボン® 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.kobayashi.co.jp/seihin/abn/pdf/abn.pdf>
- ⑩ ロート製薬株式会社 ロートリセ b 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://jp.rohto.com/~media/com/rohto-lycee/eyedrop/4987241135653.pdf>
- ⑪ 久光製薬株式会社 サロンパス® 添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.hisamitsu.co.jp/healthcare/products/pdf/016.pdf>
- ⑫ 大正製薬株式会社 リポビタン D ロイヤル添付文書 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.hisamitsu.co.jp/healthcare/products/pdf/016.pdf>

- ⑬ 江崎グリコ株式会社 プロテイン製品情報 アクセス日 2016.9.30  
<http://www.powerproduction.jp/products/whey/>

### 引用文献

- 1) WHO. 2000. 「Guidelines for the Regulatory Assessment of Medical Products for use in Self-Medication.2000」
- 2) 厚生労働省. 「政策レポート：一般用医薬品販売制度の改正について」 アクセス日 2016.10.14  
<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/06/02.html>
- 3) 津村直子・竹村和歌子・田中豪一. 1998. 「大学生の家庭用内服薬使用の実態と意識に関する調査」『北海道教育大学紀要』第1部 C,48,2,113-120
- 4) 高橋梓・石原研治. 2014. 「中学生の医薬品の使用実態とセルフメディケーション能力の育成」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』63, 299-312
- 5) 堺千紘・川畑徹朗・李美錦他. 2013. 「中・高校生の医薬品使用にかかわる行動および態度の実態」『学校保健研究』55, 295-307
- 6) 森口弥寿々・石原研治. 2012. 「セルフメディケーション時代に即した医薬品情報の収集と養護活動への応用」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』61, 319-335
- 7) 上敷領淳・竹谷翔太・江本基樹他. 2014. 「高校生の喫煙習慣が及ぼす薬物乱用のリスク並びにセルフメディケーションへの影響」『医療薬学』44（10）. 609-617
- 8) 谷川尚己・守谷まさ子・金森雅夫他. 2014. 「大学教員による小学生を対象とした保健指導—薬教育の実践およびその理解度について—」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』11, 63-69
- 9) 寺町ひとみ・太田拓希・香田由美他「小・中・高校生の「医薬品の正しい使い方」に関する知識・意識および指導実施状況」『医療薬学』38（12）. 767-779
- 10) 杉山寿美・上本久美・石永正隆. 2002. 「女子大学生のサプリメントの利用実態と食に関する保健行動」『日本栄養・食糧学会誌』55, 2, 93-103
- 11) 堺千紘・川畑徹朗・宋昇勲他. 2012. 「中学生の医薬品使用行動の実態とその関連要因」『学校保健研究』54, 227-239
- 12) 望月眞弓. 2015. 「よりよいセルフメディケーションの実践に必要な知識」『学校保健研究』56,400-404
- 13) 和唐正勝・高橋健夫他. 2015. 『現代高等保健体育』（大修館書店）
- 14) 堺千紘・川畑徹朗・宋昇勲他. 2013. 「青少年の医薬品使用行動の関連要因に関する文献研究」『学校保健研究』55, 46-52
- 15) 成井浩二・末次大作・渡辺謹三他. 2010. 「改正薬事法施行以前における一般用医薬品とセルフメディケーションに関する一般消費者の意識調査」『医療薬学』36,4,240-251
- 16) 北垣邦彦. 2015. 「我が国の学校における医薬品に関する教育の過去・現在・未来」『学校保健研究』56, 396-399
- 17) 富岡剛・上田裕司・鬼頭英明他. 2012. 「新高等学校学習指導要領による科目「保健」の医薬品に関する授業実践研究」『教育実践学研究』13 第1・2号合併, 21-30